



203号

2015 / 5 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli-san.com/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
◆‘わんりい’ HPのアドレスが上記になりました。



鵜飼 2007年9月7日 漓江の畔にて 撮影：満柏

魚を呑みこまないよう川鵜を狩りに出す前に首に細い輪をつけるらしいです。本当なのか定かではないのですが、なんだかかわいそうに感じます。しかしよく見ると、写真の川鵜は鉄線で地面に繋がられています。この川鵜は漁に出ることはなく観光客の記念写真の道具でしょうか。そのまま水墨画を見るような漓江の風景には、鵜飼の小舟と鵜が欠かせません。



桂林抒情 撮影：満柏

‘わんりい’ 5月号の目次は最終ページにあります

北京の野生の小動物として、今日は、リスをご紹介します。大都会にリスが住み着いていると言うのは、ちょっと意外ですが、日本でも、皇居等は別格としても、明治神宮や新宿御苑、都内各地の由緒ある公園などにも生息しているようですから、余り珍しいことではないようです。しかし、日本では、彼らに会うとしたら、彼らの住む場所に出かけて行って辛抱強く待たなければいけません。

ところが、私が2001年に初めて滞在した清華大学の構内では、散歩していると街路樹の枝の陰から覗いていたり、芝生で食糧を集めていたり、と身近で見ることが出来るのでした。人間に近寄ってこそ来ませんが、人を恐れないで自然に振舞っていました。

ある時、珍しく複数のリスが縦一列で走ってくるのに出くわしました。先頭のリスは明らかに大きくて、後ろの3匹は子供、母親と3匹の子リスの一行でした。行先は決まっているようで、母リスはまっしぐらに走ります。前方にちょっとした溝がありました。溝と言っても、深さは20センチ程で水は無く、溝の側面はコンクリート製ではなくて、石積みでゴツゴツしていますが、直角に近い傾斜です。母リスは、その斜面を駆け下りて、反対側の斜面を登って溝を越えました。子リスたちは、降りるのに一瞬立ち止まりましたが、すぐに同じように駆け下り、母リスの通った道を駆け上がって、行ってしまいました。ところが最後の子リスが、降りた後、反対側に上手く上がれず、立ち往生してしまいました。先に行ったリスたちは、もう私の視界から消えていました。

ほんの1、2分のことでしたが、見ている私もどうしようかと思ったとき、母リスが戻って来ました。子リスはちょっとウロウロしましたが、別に助けを呼ぶような声は聞きませんでした。母リスの方が、一匹いないと気が付いて戻ってきたのでしょうか？ それとも、子リスが、何か人間には分からない合図をしたのでしょうか？ 母リスは、反対

側から子リスの所へ降りてくると、先程とは違った所をサッと上りました。子リスもそれを見て、同じように上ると、今度はうまく上れて、母リスについて行ってしまいました。「やれ良かった」と辺りを見回すと、当のリスの親子は、もう何処に行ったのか、見えなくなっていました。母リスが戻ってきた時、先に行った子リス達も何処にいるのか、その姿は見えませんでした。

ほんの一瞬の出来事だったのですが、人間だったらこのように素早くは対応できないでしょうね。「あら、Gちゃんが来てないわね。ママが連れてくるから、あなた達はここでジッとしているのよ。外へ出では駄目よ！」と言い聞かせて、母リスは溝に戻り、「Gちゃん、ママのする通りにして上って来て！」と言って手本を見せて溝を上ったのでしょう。こんな会話を一瞬のうちに交わすのは、本能ですね。

友人から聞いた話では、芝生で考え事をしたりして、長いこと動かないでいると、人間の直ぐ近くまで来て木の実を拾ったり、偶には学生達が落としたスナック菓子を拾いに来たりするけれど、決して袋をめがけて、人間に近寄っては来ないそうです。野生の動物としては随分恵まれた環境にいるリスたちですが、野性は充分に保っています。

因みに、私は実物を見ていないのですが、友人は家の近くの草むらで、ハリネズミを捕まえたそうです。一旦家につれて帰りましたが、ベランダでは気の毒だと気が付き、元の場所に放してやったそうです。

清華大学は、この15年の間に、国の方針で、世界に通用する一流大学を目指すとして、理系の単科大学から、総合大学に変わり、大学の正門のある東側には、高層の教室棟や研究室棟が林立し、国際規格の競技場や、近代的設備の劇場等も建設されています。これからは、職員の居住区が多い南西側の改修が予想されますが、せっかく自然が豊かなキャンパスですから、人間ばかりでなく、鳥や小動物にも棲家を提供してやって欲しいと、密かに願っています。

bào hǔ féng hé
暴 虎 冯 河bào hǔ féng hé
暴虎冯河〈述而第七〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



子路は孔子の弟子の中では最も年長で、勇猛果敢な人物として名が知れわたっていました。孔子も、「由也果，于从政乎何有？(Yóu yě guǒ, yú cóng zhèng hū hé yǒu?)」。(由や果なり、政に従うに於いてや何か有らん)〈雍也第六〉と言って、常日ごろからその勇敢さを認め、政治に携わっても、問題なくやっていけるだろう、と評価していました。由とは子路の本名です。また、君主に仕えるにはどうしたらよいかと子路が尋ねた時、孔子は、「勿欺也，而犯之。(Wù qī yě, ér fàn zhī)」。(欺くこと勿れ。而して之を犯せ)〈憲問第十四〉と答えています。自分を欺くことなく、お上の機嫌を損ねるようなことがあっても、正しいと思ったら堂々と進言しなさい、という意味です。誠実で勇敢な子路の性格を見込んでの言葉です。しかし一方、子路の勇敢さは、孔子にとって危惧の種でもありました。その勇敢さは孔子の考える勇敢さとは少し違っていたからです。いつも勇み肌の子路の姿を見て、「若由也不得其死然。(Ruò yóu yě bù dé qí sǐ rán yě)」。(由やの若きはその死を得ざらん)〈先進第十一〉とも言っています。あんな調子ではまともな死に方をしないだろう、ということです。

ある時、孔子が顔回に向かって「任用されれば直ちに正義を実行し、捨て置かれれば秘かに時を待つ、そんなことができるのは私とお前ぐらいかな」と言ったことがあります。側で聞いていた子路は、自分よりはるかに年下の顔回が、日ごろ敬愛してやまない孔子と同列に扱われるのが甚だ面白くなかったのでしょう。すかさず「一国の大軍を率いる

としたら、先生は誰と共にされますか」と孔子に詰め寄りました。「軍事のことなら当然お前だよ」という答えを期待していたわけです。ところがその答えは子路にとって意外でした。

「暴虎冯河，死而无悔者，吾不与也。(Bào hǔ píng hé, sǐ ér bù huǐ zhě, wú bù yǔ yě)」(暴虎冯河、死して悔ゆる無き者は、吾與にせざるなり)〈述而第七〉。虎に素手で立向かい、大河を徒歩で渡り、死んでも悔いがないような無謀な者と一緒に行動するわけにはいかない。これが孔子の答えでした。「暴虎冯河」は無謀な行為を表わす四字熟語として今でも使われることがあります。「暴虎冯河の勇」とも言います。

孔子はさらに続けます。「必也临事而懼，好谋而成者也。(Bì yě lín shì ér jù, hào móu ér chéng zhě yě)」。(必ずや事に臨んで懼れ、謀を好んで成す者なり)。戦争の怖さを自覚し、謀をめぐらし問題を解決する。そんな人と行動を共にしたい。戦闘よりも策略、武力よりも外交。名指しこそしていませんが、孔子が子路に告げたかったのはこのことです。それは孔子の持論であったと同時に、可愛い弟子に対する精一杯の心遣いであったと思われる。

しかし子路がそのことをどこまで理解していたか。やがて子路は自ら仕えていた衛の国の内乱に進んで身を投じ、戦死してしまいます。その最期は、勇猛の士に相応しいものであったと伝えられますが……。

(わりりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

【前回のあらすじ】 前回では、趙国の大宦官である妙賢が希世の宝物「和氏璧」を楚国で石工として働いていた莫存からを譲り受けました。妙賢は自分のものにしたかったのですが、その噂は趙国の恵文王の耳に入り、やむを得ず「和氏璧」を国に献上しました。そして「和氏璧」は長年の流離さすらいの運命を終え、趙国の国宝になりました。



趙国は「和氏璧」を得て半年後のある日、趙王の前に兵士が来て伝えました。

「秦国からの使者がご来訪されました」

趙王は吃驚しました。

当時は中国の戦国時代で諸国が覇権を争っていましたが、その中でも秦国は国力の一番強い国でした。それ故、周辺の弱小国は秦国に虐められることも多く怖れていました。ですから趙王は、秦国からの使者がいい知らせを届けに来たのではないと思いました。しかし会わないわけにはゆきません。礼を正して秦の使者を迎え入れました。

秦の使者は秦の昭襄王しょうじょうおうの書面を届けに来たのですが、実際、その手紙には「最近、趙王は天下に知られた『和氏璧』を手にいれたと聞いている。秦の十五の城とその『和氏璧』を交換したいと思っている」というような内容が書かれていました。

趙王は書面を読み悩みました。素直に璧を差し出せば、秦国は本当に十五の城を趙国に譲るのでしょうか。しかし、「和氏璧」を秦に差し出さなければ、秦国の怒りを買って、攻めてくる恐れがあります。

趙王は大臣たちと共に良い策はないものかと長い時間を掛けて議論しました。が、話はなかなか纏まらず、良い策も出て来ませんでした。

困り果てていると、趙国の大宦官である妙賢が趙

王の前に進み出て言いました。

「私の家来りんしゅうじょに藺相如という智謀たけに長る、勇気ある男がいます。この者を呼んで良い策がないか訊いてみたらどうでしょうか」

「良い考えを持っていそうなら誰でもいいからその者の意見を訊いてみよう」

と趙王が答えました。そこで早速、藺相如を呼び寄せると趙王の前に連れて来させました。

「そなたはたいそう智謀に長けていると聞いた。秦国は十五の城と我が国の国宝「和氏璧」を交換しようとしてきたがどうしたものであろうか。」

「秦は強国です。趙国が秦国に太刀打ちできるとは思えません。『和氏璧』を秦国に渡さなければ災いが趙国を襲うでしょう」

「しかし、和氏璧を渡しても、城を得られない可能性があるであろう」

「その可能性は確かにあると思われます。しかし『和氏璧』を秦国に渡さなければ趙国の咎になります。和氏璧を渡して、秦が城を趙国に渡さなければ、秦国の咎になります。両者比べてみれば秦国の咎にする方が良いと思われます。秦国が約束通り『和氏璧』と城を交換しなかったならば『和氏璧』を持ち帰ることが肝心なところだと思います」

「良い策だが、しかし、誰が使者として行けば良いのか。そして城を貰えなかった場合どのようにして『和氏璧』を無事に持ち帰るといいのか」

「大王の周りに適任者がいなければ私が秦に参りましょう。城を手に入れたら『和氏璧』は秦に譲ります。城が得られなかった場合は、必ず『和氏璧』を無事に持ち帰って参ります」

そこで趙王は藺相如を使者として秦に送りました。

秦に着いた藺相如は秦の昭襄王の広い豪華な殿上に迎えられました。

秦の昭襄王は藺相如と引見するや、「そなたは『和氏璧』を持参したのか。ならばさっそくその宝玉を朕に見せよ」と待ちきれないように催促しました。

藺相如は秦王の前に置かれた卓台に「和氏璧」が入った箱を置くと、秦王は直ちに自ら蓋を開き、「和氏璧」を包んだ絹の布を解(と)きました。そして宝玉が現れると、秦王は息を呑み目を大きく見開いてしばらくの間うっとり「和氏璧」に見とれていました。

「秦王、『和氏璧』はいかがでしょうか」

と藺相如は「和氏璧」に見とれたまま無言でいる秦王に声をかけました。

「本当に素晴らしいものだ、確かに名声轟く希世の宝物だ。宮廷内のすべての大臣を呼び、共に鑑賞しよう」

秦王の命令が下り、大臣たちが続々殿上に詰めかけ「和氏璧」を囲んで鑑賞しました。

ようやく大臣たちが鑑賞し終わり、大臣たちの賛嘆する言葉が交わされている中、秦王は続けてさらに

「この宝物を後宮の王妃たちにも見せてやるがよい」

と命令しました。

藺相如は落ち着いてずっとそばで待っていましたが、秦王は大臣たちと「和氏璧」の美しさを語り合うことに夢中になり、藺相如の存在をすっかり忘れたかのように全く目も向けませんでした。

それからまた長い時間が過ぎて、「和氏璧」はようやく後宮から戻って来ました。

「王妃たちは何と saying いたか」

と秦王は訊きました。

「皆、口々に『和氏璧』の美しさをほめそやしておりました。そして、『このような天下一品の宝物の

所有者は我が秦国にこそ相応しいものです』と皆がおっしゃっておりました」

「和氏璧」を持ち帰った者の言葉を聞いた大臣たちも、

「そうです。この宝物の加護があれば我が国は一層強大になります。国が強大であることは国民にとっての幸せでもあります」

「そうです。そうです。大王万歳!」

と言いました。

秦王は大層なご機嫌で「ハハハ」と高笑いし、「和

氏璧」と交換するはずの城の話をするどころか、藺相如の存在さえすっかり忘れていたようでした。そんな秦王の様子を見て藺相如は、秦王が城を趙国に譲る気持がないことが分かりました。藺相如は秦王の前に進みま

した。「大王、宝玉に疵があります」

「どこにだ」

「私に宝玉をお渡ししてくださ

い。その場所をお教えいたします」

秦王は「和氏璧」を藺相如に手渡しました。すると藺相如は突然「和氏璧」を高く掲げて近くの柱に走って近づくと、怒り露わな表情で声を震わせ言い始めました。

「大王、ご覧ください。この柱の礎石を。今無理やりに私から宝玉を奪い返そうとされるなら、私はこの宝物を石に投げつけます。そうすれば宝玉はたちまち粉々に砕けるに違いありません。私はここに来る前に既に死を覚悟して参りました。しかし、私が命を絶つ前に私の話を聞いてください」

秦の時代は、王の命令が無ければ、武器を持って殿上に入ってはならない規則でしたので、兵士たちは宮殿の外から殿内の様子を見ただけで、王の指示がない限り入れません。



満柏 画

秦王は「和氏璧」が砕かれるのを心配して、

「解った。そなたから力ずくで宝玉を奪うようなことはせぬ。そなたは一体何を言いたいのか。言いたいことがあるのなら言って見るが良い」

「大王は『和氏璧』が欲しくて、『和氏璧』を秦国の十五の城と交換しようと趙王に書面を出されました。我が趙王は家臣を集めていろいろ相談されました。趙国の家臣たちは、自分の強大さを頼んで常に隣国を虐げている秦国が、今、趙国の宝である宝玉を差し出して果たして十五の城を趙国に渡すだろうかと心配していました。そこで私は次のように趙王に申し上げました。庶民でさえ騙し合いは義に外れたこととされています。ましてや強大な秦国の大王が、璧の一つぐらいで天下の信用を失うようなことはなさないでしよう。趙王は私の話を尤もと思ひ、五日間の物忌みをして、体を清めてから、私を使者として『和氏璧』を届けさせました。それというのは、貴国の権威を尊重し、貴国に敬意を払うためでもあります。ところが大王は趙国の宝である『和氏璧』を貴国の大臣たちや王妃たちに鑑賞させた上、趙国の使者である私の存在を無視し、約束の城の話にも全くお触れになられません。いやしくも国使である私に対するこのような扱いは大王の傲慢さであり、ご自分が申し出られたことに対して誠意がないというべきでしょう」

「そなたに言われるまでもなく約束は約束としてきちんと守る用意はある。それでは地図を持って来させて趙国に譲る十五の城を教えてやろう」

秦王は大臣に地図をもってこさせると、地図のあちこち指して説明しました。しかし、その説明には心がこもっていると思われませんでした。

藺相如はまた一策を申し出ました。

「分かりました。秦王が本気で宝玉を受け取ろうとおっしゃるのでしたら、我が趙王と同じように真剣に五日間の物忌みをされ、それが済んだ後で盛大に交換式を催すべきだと思います。それまでこの宝玉は私が保管させていただきます」

秦王はどうしても「和氏璧」を手に入れたいと思

っていましたので、今は藺相如の話に従わざるを得ず、藺相如と「和氏璧」を宿所へ送り届けると、嚴重に監視するよう兵士たちに命令しました。

秦王は藺相如が言ったとおり、五日間の物忌みを始めると同時に盛大な儀式の準備を家臣に命じました。

ところが秦王の物忌みが終わり、儀式の準備も整った五日目の日、儀式の会場に藺相如が何も持たずにやってきました。その姿を見た秦王は「なぜ手に何も持っておらぬのか。「和氏璧」はどうしたのか？」

と聞きました。

藺相如は落ち着いた態度で答えました。「強大な秦国に比せば趙国は弱小国です。秦国が間違いなく十五の城を趙国にお渡し下さるならば、趙国が「和氏璧」を差し上げない筈はありません。しかし私が見るところ、秦王は「和氏璧」だけを欲しがっており、趙国に城をお渡し下さる誠意が感じられません。そのような訳で私は「和氏璧」をこっそりと趙国へ送り返しました」

そして胸を張り堂々と続けました。

「大王の選択は、私を殺すか若しくは十五の城を趙国に渡して「和氏璧」を入手するのいずれかになりましょう。私は大王にその選択をお任せするのみです」

秦王は大層怒り、藺相如を殺そうと思いました。しかし、天下に笑いの種を蒔くことになることを恐れ、また藺相如という人物にも心を打たれ、最終的に藺相如を放免しました。

これが「完璧帰趙」という熟語となり今も伝わる物語です。

史書では、「和氏璧」は結局、強大な秦国のものになりました。しかし、その流浪の運命を逃れることができず、戦乱続く混乱の時代、覇者が入れ替わる中で「和氏璧」はころころとあちこちに流転して、後唐(紀元923～936年)の時代にとうとうその姿は見失われ、今も謎のままになっています。

(終わり)

私の調べた諺・慣用句 39
人口に膾炙する

三澤 統

「月形半平太は実在の人ではなく、芝居に登場する幕末の志士である。『月さま、雨が』『春雨じゃ、ぬれゆこう』。これほど人口に膾炙した時代劇のせりふも珍しい」。

上記は過日の朝日新聞の「天声人語」の書き出しです。ここに見る“人口に膾炙”とは、どんな意味でしょうか？早速、調べてみました。

辞書にはそれぞれ次のように載っています。因みに“人口”は人の数の意味ではなく、人の口

を指しています。

▲小学館 デジタル大辞典：

「人口に膾炙する（膾（なます）と炙（あぶりにく）とが、だれの口にもうまく感じられるところから）人々の話題に上ってもてはやされ、広く知れ渡る。」

▲小学館 日中辞典：

「脍炙人口 (kuài zhì rén kǒu) 人口に膾炙する。(文章や事柄が) 人々によく知られ親しまれている。」

この成語の由来は〈孟子¹⁾。尽心下〉です。

春秋時代に、孔子の弟子に、ある父子がおりました。父親の曾皙(そうせき)は羊棗(ようそう一種の野生の果実で、俗に牛乳柿と呼ばれている)を好ん

で食べました。息子の曾参は大変親思いでしたので、父の死後は自分が羊棗を食べるのは忍びないと思っていました。曾参のこのような心掛けが儒家の間で話題になり称賛されました。

戦国時代になって、孟子の弟子の公孫丑は曾参が父親の死を悼んで羊棗を食べないことがなぜ称賛されるのか不思議に思いました。実は曾父子は共に膾炙と羊棗を好んで食べていました。ですから父親が死んだ後、膾炙と羊棗と両方をやめないで羊棗だけ食べないことが理解できなかったのです。

師の孟子のところへ行って、教えを請い、「先生、膾炙と羊棗とでどちらが美味しいですか？」と尋ねました。すると孟子は「当然、膾炙が美味しいね、膾炙が嫌いな者は誰もいないのではないか」と答えました。

そこで公孫丑は重ねて問いました。「膾炙が羊棗より美味しいのであれば曾参はどうして膾炙は食べるのに羊棗だけを食べることを止めたのだろうか？」

孟子は答えて言いました。「膾炙は誰もが好きな食べ物だ。羊棗の味は膾炙の味にはかなわないが、羊棗は曾皙が特別に好んだものなのだ。だから曾参は羊棗を食べることを止めて父を偲んだのだ。いわば姓と名前のようなもので、目上の人の名前を口にしないのは、名前は那人固有のものだが、姓を口にすることができるのは²⁾姓が一族共有のものであるからなのだよ」

孟子のこの話を聞いて公孫丑は曾参の逸話に込められた道理、つまり、目上の人の名前は口にしないのと同様に、目上の人が好きでいたことは尊重して慎むべきである、と悟ったのでした。

〈注記〉

1) 孟子(もうし、紀元前372年?～紀元前289年)戦国時代中国の儒学者。

2) このことについて、小学館中日辞典の「讳(諱)」の項(忌む、はばかる、タブーなどの意)に次のような説明が有ります。

「かつての中国では、自分と同等または目上の人の実名(姓に対しての名前)そのまま書いたり口にしたりするのは失礼なこととされ、そのために、他人が呼ぶときの名、すなわち字が用意されていた。」

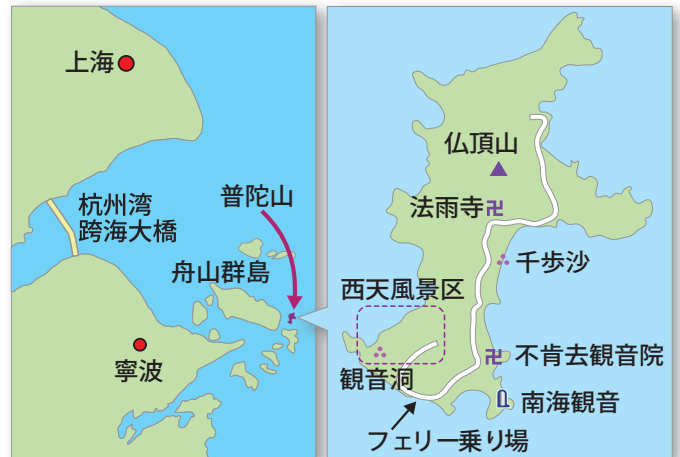


二日目の朝が来た。普陀山に行くにはバスに乗り高速道路経由で行く方法、高速艇で行く方法、また舟山市には飛行場もあり多くの選択肢があるが、我々は上海市内にある人民広場前から出発するバスで行くことにした。ホテルは上海南浦瑞峰酒店で普陀山滞在を挟み、前後2泊することになっている。大きな荷物はフロントに預けて朝6時にチェックアウトした。

ここで普陀山の紹介をしたい。「普陀山」は、「山」とあるが実は「島」の名前である。浙江省・舟山群島に属しており、広さは12.5km²しかない杭州湾の湾口にある小島だ。一番高い山は290m余りの仏頂山で、吹けば飛ぶような島である。しかし中国の四大仏教名山のひとつであり、百を超える寺院と千人以上の僧侶が生活している。

この島に年間360万人を超える観光客が訪れると言うから驚きだ。ちょっと信じがたく、となればあの小島に一日1万人平均が訪れる計算になる。白髪三千丈の類に思われる。残る四大仏教名山は、五台山(最高峰/葉頭峰3058m・山西省)、九華山(最高峰/十王峰1342m・安徽省)、峨眉山(最高峰/万仏頂3098m・四川省)である。普陀山は、島全体が「海天仏国」と別称される観音霊場であり、観音菩薩を祀っている。他の名山も、五台山は文殊菩薩、九華山は地藏菩薩、峨眉山は普賢菩薩をそれぞれ祀っている。

普陀山が観音霊場となったのは面白い謂れがある。916年のことで日本は平安時代、中国は907年に唐が滅び五代十国時代である。中国への渡来僧の慧鑿大師が留学を終え日本に帰国しようとした時だ。五台山で観音像を求め寧波の港から出航し舟山列島にさしかかった時、海面から蓮の花が現れて船の行く手を遮ったため、普陀山にある潮音洞に停泊した。大師は観音様が中国に残りたがっているのだと考え、観音像をこの島に残していったという。それを見た普陀山の住民が観音像を祀ったらしい。島



左図は上海と普陀山の位置関係です。右図、普陀山全図

の南東にある潮音洞のそばに「不肯去観音院」という立派な寺院がある。「不肯去」は、「(日本に) 行くのを拒む」という意味で、観音様の気持ちを^{そんたく}忖度する名称がつけられているが、それにしても面白い名前をつけたものだ。

さて、朝7時に人民広場前から出発した高速バスは、上海博物館の前を通り高速道路に入った。1時間半位たったであろうか、「南湖」というサービスエリアに着いた。15分のトイレ休憩である。トイレに行く途中に売店があり、いろいろ売っているが薄暗くてかつ商品が雑然と置かれていてあまり見る気も食べる気も起きない。トイレは広いが管理が行き届いておらず個室のドアや水道の蛇口は3分の1は壊れていた。あとはご想像にお任せするでしょう。またバスは走り出したが、そのうちに友人が「誰かが杭州湾にかかる長い橋がもうすぐ見えると言っている」と教えてくれた。するとまもなく「杭州湾跨海大橋」が見えてきた。気が付くとバスはもう海の中の真っ直ぐな道を走っていた。

この杭州湾の中ほどに架けられた長大橋は2008年5月1日に開通した。北京オリンピックが開催された年である。全長約36kmでとにかく長い。36kmと言えば東京駅を出発して東海道線で横浜駅を過ぎて戸塚駅近くまでの距離である。ほぼ直線で嘉興と寧波を6車線で結んでいる。この橋ができ



潜水艦を思わせるフェリー

るまでは上海から寧波まで陸上で行くには、杭州湾に沿ってまずひたすら西に向かって杭州まで行き、そこで東に向きを変えてひたすら走行するしかなかった。時間短縮による経済効果は計り知れないであろう。杭州湾は水深が浅いのでこれだけの橋の建設が可能となったのである。

バスは橋を渡り終え、またしばらく高速道路を走り続ける。そしてようやく「舟山」と書いてある出口で一般道に出た。最終的に普陀山行のフェリー乗り場の近くまで行くのであるが、さらに一般道を延々と走る。そして大きな吊り橋や長い橋を3つくらい渡り11時30分ようやく終点に着いた。4時間半かかったわけである。それでもこれらの橋が架かっていないときはかなりの時間を要したらしい。

駐車場からすこし歩いて天守閣のように高く聳えている建物に向かう。建物に入ると商店や食堂がありその奥がフェリー乗り場らしい。お昼になったので皆でバイキング形式の昼食を摂る。25元と安かったがお世辞にも美味しいとは言えない。“一分銭一分貨”といったところか！ 食事中に知らない男性から直径数センチのプラスチック板にKと書かれたワッペンが配られた。友人に聞くとあのバスにはガイドが付くことになっていてバスの人はその人が率いるツアーの一員となると説明を受けた。道理でチケットが少し高いと思ったが、むしろガイドが付く方が安心である。〇〇時に〇〇に集合すること、と言っているようであるが会話の速さについていけない。初めていくところは友人と行くに限る。

12時半ころ船着き場に行くと先ほどの男性が皆

を誘導する旗を掲げている。ここからあの旗の下に団体行動となった。ゲートを入ると岸壁に何とも異形な舟が停泊している。とても観光地のフェリーとは思えない。まるで潜水艦が海面に浮上したような形をしている。デッキに上がって外の風景を見る造りになっておらず、じっと座って窓から外を見るしかない。その窓はと言えば汚れていて見づらい。黙っていても毎日1万人来るわけであるからお客を呼び込む努力はいらない。したがってガラス拭きなんかしないのであろう。仏教の聖地に向かう舟であるからもうすこし綺麗にすればいいものを。そんなことを思っていたら出航して10分もたたないうちに対岸に着いた。そのうち吊り橋か海底トンネルで本土とつながるかもしれない。

上陸しガイドについて行ったところにマイクロバスが停まっていた。黄色のバスで車体には「普陀山旅游巴士」と書いてある。これがこの島の交通機関である。電車は勿論ないがタクシーもない。この島で過ごした2泊3日、よく利用したが乗るたびに5元払った。20数名全員が乗り込むと島の西北端にある「観音洞」に向かった。

この地域は「西天風景区」と呼ばれ、洞窟や奇岩の多い所だ。観音洞は大きな岩の洞窟であり、名前は失念したがあるお寺の境内の一番奥にあった。その洞窟に行く前に皆お線香の売り場に行って、長さが30～40センチもあるお線香の束を買い求めている。友人たちはまずお寺の前に立ち、束の中から3本くらい取り出し、大きな香炉の形をした火鉢の中にある火種で火を付ける。それを額の前に掲げ東西南北にそれぞれ3回ずつ頭を下げている。それが終わると寺院の中で高さ10センチ程度の台の上に膝を付け頭を下げたまた三回位お祈りしている。そこが終わると洞窟の前でまた同じことをしている。お線香が沢山必要なのである。

友人が「お線香を買わないの？」と聞くので、「私も仏教徒だが、日本にはこのような習慣はない。手を合わせて祈っているよ」と言うと、あきれたような顔をしていた。仏教もところ変われば祈り方もいろいろだ。こんなに大袈裟に祈りを捧げているのであ

るからさぞかしご利益も大きいであろう。

次に向かった所は奇岩のあるところだ。最初の奇岩は、「二亀聴法石」だ。大きな岩の側面に亀がへばりついているように見える。以前、張家界に行ったとき林立している岩にいろいろな名前が付いていたのを思い出す。日本は岩山が少ないので何かになぞらえた名前のある岩はあるとは思いますが私は知らない。驚いたのは少し歩いた



観音洞と観音洞横の寺院に長い線香を手向ける観光客

ところにある「磐陀石」である。掲載した写真を見ていただきたい。巨大な岩の上に大型バスくらいはある岩が乗っかっている。手で押してもごろんと転がり落ちそうなバランスである。地震の多いわが国ではまず見られない光景である。その石の側面に大きな文字で「磐陀石」と彫っており、文字を赤く塗っている。その文字のとなりに「侯継高書」とタテに小さく彫っており黒く塗られている。磐陀石の磐は、大きな石という意味であり、陀は普陀山の陀を取ったのかと思ったがネーミングの由来は知らない。

私は、侯継高という人が少し気になった。それはこの島の何か所かでこの名前を見たからだ。日本に帰ってヤフーで検索したが、名前は出てきたものの「日本風土記」と書かれてあるだけで何のことかわからない。何人かの中国人の友人に聞いてみたが皆知らな



今にも転がり落ちそうな磐陀石。「磐陀石」の文字は侯継高の書である

いと言う。そこで前号で書いた上海の友人と町田市在住の友人Sさんに調べてもらった。

その結果次のことがわかった。侯継高は明(1368年～1644年)の時代の人で1533年に江蘇省の肝胎というところで生まれ1602年70歳で没している。武人で各地の軍隊の指揮官を歴任している。この時代、倭寇が中国の沿岸を荒らしまわっていたが、本土防衛のため倭寇と幾度となく戦

い戦果を挙げたようである。倭寇については前期倭寇と後期倭寇でその実態が異なるなどいろいろな見方があるがここでは問わない。武人として傑出していたらしいが彼の名が歴史に残ったのはいくつかの著作であり書である。武人にして文人であったのだ。著作については、〈游補陀洛迦山記〉、〈補陀山志〉、〈全浙兵制考〉、そして〈日本風土記〉がある。

日本風土記には、当時の日本の地理、政治、経済、文学、風俗、人情などが詳しく書かれているそうである。早稲田大学にはこの書が保管されているという。また書家でもあり、その筆致は雄渾の一言である。普陀山には何か所か彼の文字が石に刻まれているが、そのひとつが前述の「磐陀石」と書かれたものである。

また「海天仏国」という文字が刻まれている石がある。この文字により普陀山は、別名を海天仏国との美しい名前をもらっている。前述の中国の四大仏教名山の中で海上にあるのはここ普陀山だけなので、この名を付けたようだ。なぜこのような優れた人物があまり知られていないのであろうかと思った。相手が倭寇ではなく国との戦いであれば有名になったかもしれない。しかし名が埋もれそうになりそうな人物でもその功績にはもっと光を当てて小さくとも銅像のひとつでも建立したら如何なものか。

次は島内一番の大きさを誇る「普濟寺」に向かったが次回に譲ることにする。

(続く)

ní hóu
泥 猴

nǎi nai shuō guò
奶奶说过，

bà ba xiǎo shí hòu shì gè ní hóu
爸爸小时候是个泥猴。

kě shì xiàn zài
可是现在，

bà ba què bù xǔ wǒ wán ní
爸爸却不许我玩泥，

yě bù xǔ tī qiú
也不许踢球；

shù bù xǔ pá
树，不许爬，

yǒng bù xǔ yóu
泳，不许游，

jiù lián shuō huà yě de xì shēng xì qì
就连说话也得细声细气，

hǎo xiàng dà diǎn r shēng jiù shǎn le shé tou
好像大点儿声就闪了舌头。

bà ba
爸爸，

wǒ zhēn xiàn mù nín xiǎo shí hòu
我真羡慕您小时候，

shì gè huó po kuài lè de ní hóu
是个活泼、快乐的泥猴。



腕白坊主

おばあちゃんが 言っていたよ

パパは 子供の頃は 腕白坊主だったって

それなのに 今では

パパは かえって

ボクが泥んこ遊びをするのを許さない

フットボールも許さない

木は 登っては 駄目

泳ぎは いったは駄目

話をするのでさえも

か細い声で いわなければいけない

まるで 声を少し大きくしたら

喉がひきつると思っているんだ

パパ

ボクはパパのこどもの頃が うらやましいよ

活発で 楽しい 腕白坊主だ



国際交流員として2004年から2年間、青森県で国際交流に奮闘された鄧仁有さん、その時の滞在記は4月号まで「鄧さん頑張る」として「わんりい」に掲載されました。その後帰国され、山西省太原市にある旅游学院の日本語ガイド養成コースで教鞭をとられています。これから数回、鄧さんが執筆した日本語ガイド資格試験用テキストから、山西省の名所旧跡をご紹介します。

山西省の省都・太原は2,500年の歴史があると言われ、古くから「晋陽」と呼ばれています。春秋時代、晋の定公15年(紀元前497年)、晋国の重臣・趙簡子趙鞅が家臣の董安于に命じて晋陽城を築城させました。当時の晋陽城は今の太原市から西南30キロ程の晋源区古城営村に有りました。晋水と呼ばれる川の北側にあるので「晋陽」と呼ばれていました。



太原市街と迎沢大橋。この橋は山西省を南北に流れる汾河にかかる巨大な橋。全長970メートル、幅50メートル。

(中国サイト百度百科より)

紀元前248年の戦国時代の後期、秦の大將蒙驁が趙に攻め込み、晋陽を占領して太原郡を設けました。27年の後、秦の始皇帝が六力国を滅ぼし、国を統一しました。全国に36の郡を設けて、晋陽城を太原郡の中心地としました。漢の武帝の時代に全国を13の刺史郡に分け、晋陽を并州刺史郡の中心地としました。それで、晋陽は「并州」と呼ばれているのです。太原の略称「并」はここから由来しています。

隋と唐の時代に太原は最も盛んな時代を迎えました。隋の文帝が太原を軍事要塞とし、相次いで三人の息子の楊広(晋王)、楊浚(秦王)、楊諒(漢王)を遣わし、晋陽を守らせました。隋の時代の末期に、李淵は隋の煬帝に「山西河東撫慰大使」に任命され、太原とその近郊を守る武将になりました。しかし、専制政治と搾取を続ける煬帝に対し、反乱の烽火が各地に上がり、617年息子の李世民と太原から蹶起し、汾河と渭河に沿って、半年もかからずに隋の都の長安を攻め取りました。

唐の時代は太原の「黄金時代」でした。太原は唐王朝の創業の地で、北方の軍事要塞にもなっているのです。唐王朝に特別に重視されていました。晋陽を太原府に格上げしたので、「北都」や「北京」と呼ばれました。当時の晋陽城は汾河をまたいで、東部、中部、西

部に分けられました。晋陽城は工業が大変繁栄し、冶金、鑄造、磁器、醸造業が全国に知られ、その影響は東南アジア諸国にも及び、この雄大な晋陽城は唐の時代の北方の重要な砦として、後の「安史の乱」



(ウィキペディアより)

の反乱軍を防ぐ為に大きな役割を果たしました。その後の五代十国時代、後唐、後晋、後漢の皇帝は太原から皇帝の座に就いたので、太原は「龍城」と呼ばれています。

979年、宋の太宗・趙光義が自ら兵を挙げ、北漢の晋陽城を五ヶ月間に渡って取り囲み、降伏させました。趙光義は宋王朝の統治に不利にならないように、晋陽城に火を放ち廃墟としました。後に流民を安住させるために、かつての晋陽城の北側に土城を建てました。この土城は半世紀の間に次第に大きく発展し、再び「太原府」と呼ばれて、「錦繡太原城」の美称

を与えられました。土城内には「丁」字型の通りしか作らず、これはもとの「龍城」の龍を釘付けにするという意味です。

明の始め頃、太原は九つの辺境地の一つとされ、太原城は拡大され、強化され、北方民族の侵入を防ぎました。明・清2代、太原は「太原府」と呼ばれ、民国元年に「陽曲県」と改称し、山西省の省都になりました。1927年には「太原市」になり、今に至っています。



太原市の汾河両岸に設けられた汾河公園

(ウィキペディアより)

中国の笑い話 22 (「365夜笑話」より)

翻訳：有為楠君代

第62話：喉につかえて絶句する

小明は小学三年生、毎日英語の勉強を続けている。ある日、お父さんは食事中に不注意で喉を詰まらせてしまった。お父さんは慌てて言った。

お父さん「明明！ 急いで水を一杯持ってきてくれ。

喉が詰まってしまった！」

明明は笑顔で、英語で答えた。

「yes(也思)」

お父さんはそれを聞くと目をむいて怒鳴った。

「何て奴だ！ 直ぐに水を取りに行かないで、也思(でも、考える)だと？ 私に死ぬというのか!!」

第63話：親は子ではない

笑い話の《反駁の論拠》を読んで、子供は嬉しくなった。この笑い話は、一人の子供が、父親は子供ほど賢くないと言いたくて、その証拠に「万有引力はニュートンが発見したのであって、ニュートンの父親が発見したのではない」と言った話だった。この子供はこの道理を自分の父親にも当て嵌めて言ってみた。

すると、父親は笑って言った。

「私に言わせれば、父親が必ず子供より賢いというのは間違いだ。しかし、子供が必ずしも父親より賢いとも言えない。見てご覧、万有引力を発見したのはニュートンであって、ニュートンの子供ではないのだよ」

第64話：ペテン

金持ちの老人が、少年を雇って、こまごまとした仕事をさせ、月末に賃金を払う約束をした。月末になって、老人は少年に言った。

「街の市場へ行って、二つのものを買っておい

で。一つは‘わっ!’、もう一つは‘げっ!’と言うものだ。買って来なかったら賃金はやれないよ!」

少年は、騙されたと思ったが、暫く考えてから、市場へ行く振りをして出かけた。帰って来た時、少年は大きな瓶一杯に、ムカデとさそりを詰めて持っていた。それを袋の中に入れて、主人に言った。

「‘わっ!’と‘げっ!’を買って来ました。ご自分で取り出してみてください」

と言いました。老人は、袋に手を入れると、中のムカデとサソリがその手に噛み付いた。老人は、思わず「わっ!」と言って手を引っ込めた。少年は、笑いながら、

「もう一度、中を見てください。‘げっ!’がありますよ」

老人は、黙って少年に約束の賃金を支払った。

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、おついでに折に田井にお渡し下さい。

【‘わりい’の原稿を募集しています】

‘わりい’は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞いた面白い話などを気軽にお寄せ下さい。又‘わりい’の活動についてのご希望やご意見及び‘わりい’に掲載の記事などについても、簡単なご感想をお寄せいただければと存じます。

日中文化交流市民サークル ‘わりい’

「文明の衝突」について思う

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

今年に入ってから、イスラム過激派によるテロ事件が頻発し、世界中を暗くしています。

そこで、私が死蔵していたサミュエル・ハンチントンの「文明の衝突」を紐解いてみました。世界の名著といわれていたので、もう大分以前に購入していましたが、難解で2、3ページめくるだけで本棚に置いたままでした。今回もパラパラめくっていましたが、そこで思わぬ記述を見てびっくり。ロシアとウクライナの紛争を予見していたことです。

この著書は1996年11月に英語版で出版され、その日本語版は2年後の1998年に

出版されています。おおよそ20年も前に、どうして両国の紛争が予見できたのか。改めて「文明の衝突」に関心がわいてきました。次に一部(下記)を紹介します。

「ウクライナとロシアのように長距離にわたり無防備な国境を接している大国同士は、しばしば国の安全に対する不安に駆られて張り合うようになる。両国は、この状況を克服して調和の取れた共存を実現するかもしれないが、めったなことではそうならないだろう」。

他方、

「文明の観点からアプローチした場合、両国の間の文化的、個人的、歴史的なつながりが密接なことや両国でロシア人とウクライナ人が交じり合っていることが強調され、かわりに東方正教会に属するウクライナ人と東方統一協会に属するウクライナ人を分けている文明の境目に注目するだろう。つまりロシア・ウクライナ間の戦争よりウクライナ人同士での争いがウクライナの分裂を招く可能性が大きい」

とも指摘しています。

つまり分裂の可能性の核は「宗教」であると見て

います。ご承知のようにウクライナの現状を見る限り、ウクライナは「親ロシア派」と「反ロシア派」が争っています。

人類の歴史における主要な文明は、世界の主要な宗教とかなり密接に結びついています。民族性や言語が共通していても宗教が違う場合、互いに殺戮しあうことが多いのです。20世紀末には、世界のいたるところで宗教の復興が見られました。その動きは「原理主義運動」となり、各宗教の違いと宗派間対立を生みました。といて、信者が増大したわけではありません。統計資料によれば、「無宗教」「無神論者」の増加が際立っています。しかし次の2大宗教は別格です。

キリスト教徒は改宗で信者を増やしています。イスラム教徒は人口増加率の高い地域で信者が増えています。2025年ごろには世界人口の30%がイスラム教徒になるかもしれません。

さて、次にもうひとつの紛争地を考えてみましょう。

古代メソポタミア文明

古代メソポタミア文明圏は、現在のバクダード以北のイラクとシリア内のティグリス・ユーフラテス川流域に誕生した文明圏を指します。東はザグロス山脈、南のペルシャ湾、南西のアラビア台地、北のアンティ・タウロス山脈に囲まれた平地に発達。南メソポタミア(現在のイラク南部)の気候は砂漠気候。年間を通じて降雨量は150ミリ程度、気温も30度で農耕には不適切です。

一方、北メソポタミア(現在の北イラクと北シリア)は年間250ミリ程度の降雨量があります。この降水量と高原・山麓気候の北メソポタミアは「肥沃な三日月地帯」と呼ばれています。より雨量の多いアンティ・タウロス山脈の南斜面では紀元前1万年前から農耕が始まっていました。

南メソポタミアで農耕が始まったのは、灌漑施設が整備された紀元前5000年になってからでした。ティグリス・ユーフラテス川はしばしば氾濫し、安定した耕作ができませんでしたが、北メソポタミアからもたらされた灌漑施設の技術により、少ない降雨量でも農業が成立するようになりました。自然条

件を克服するという「人類の技」の賜物です。かなり高度な灌漑施設だったそうです。

そうした技術を維持し、次世代に伝承するためにはきちんとした共同体と優れた指導者を必要とします。宗教的カリスマ性をそなえた人物が選ばれて指導者となりました。巨大な権力を持つ「王」の原型です。

メソポタミアの古代都市国家では、最初に神を祀る神殿が作られ、その神殿を取り巻くように居住区が形成され、次第に大規模化して都市に発展しました。収穫された農産物は神殿に収められ、分配・備蓄などが神の命により執り行われました。そして、垂直的な社会構造が形成されるようになって、王を頂点とする支配層、神官・役人層と続き、大部分は農民と商人が占めました。

最古の都市文明シュメール

メソポタミア文明の最盛期は、謎の民族といわれるシュメール人によって築かれた文明で、人類が生み出した最古の都市文明でした。代表的な都市は南メソポタミアのエリドゥ、ウルク、ウル。エリドゥは人類最初の「王権」が誕生した都市とされ、紀元前5000年ごろといわれています。ウルクとウルには農耕に関わる集団と狩猟採集に携わる集団が合流して大きな力を持つようになりました。

又、ウルにはジグラトと呼ばれる古代宗教建造物が残っており、この建造物は旧約聖書のバベルの塔のモデルといわれています。旧約聖書に出てくるアブラハムはウルで生まれ、信仰を求めてカナン（現在のイスラエル）へと旅立ちます。旧約聖書にはメソポタミアの地名が数多く出てきます。

楔形文字もシュメール民族によって発明されました。農産物の記録を残すために考え出されといわれており、その発明は紀元前3500年ごろとのことで、粘土板に刻み込まれ、恒久的な記録は窯で焼いて保存されました。後のアルファベットの源流となったウガリット文字も楔形文字が源流であり、ウルクの王の伝説である「ギルガメッシュ叙事詩」も楔形文字があったから残されたといえます。この叙事詩がユダヤ教やキリスト教に与えた影響の大き

さを考えるとシュメール文明の素晴らしさが分かります。

シュメール文明の滅亡

この文明は紀元前5000年ごろ、メソポタミア文化圏が組織的な農耕を始めた時期に生まれ、以後紀元前1000年ごろまで5000年ぐらい続きました。シュメール文明は卓越した灌漑施設による農耕の繁栄によって築されましたが、そのシュメール文明が塩害による農業の衰退によって滅亡しました。

長年の農地使用によって土中に塩類を蓄積させ、同じ作物の連作で農地はやせ衰えました。現代流に言えば「環境破壊」による農業破壊が食糧危機を招き、文明の衰退につながったといえるでしょう。

シュメール文明が残した都市文明という遺産は、後のギリシャやローマ、更には中世以降の西洋文明に引き継がれています。そしてこの偉大な文明発祥の地が、いまや紛争地として泥沼化しています。紛争の当事者の背後には大国の影も見えます。可哀想なのは一般市民ですが、何より歯がゆいのは、何もできずただ日々を送る私たちといえるかもしれません。

‘わんりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。
新年度(4月)入会年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 ‘わんりい’
途中入会申し込みの方は、入会時期によって割引
引かれますので、下記へお問い合わせください。

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。

②‘わんりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ：042-734-5100 (事務局)

◆インターネット会員の制度もあります。アドレスを頂いた方に、毎月、カラーの美しい‘わんりい’をPDFファイルでお送りします。こちらは無料です。

◆町田各所でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

初秋の韓国低山歩き ② (2014.9.27～10.1)

関根 茂子

◆9月29日(土)前号より続き

ほどなく谷向うに清凉寺の屋根が望め、ナギナタコウジュや野菊を愛でながらゆるゆる行くとお寺に9:00着。売店があり人もいる。不要の荷を預かってもらえないかとお願ひするがだめだった。しかたなく、重たい荷を背負って(9:15)登りだすとすぐに石段道の急登になる。

雨はたいしたことが無いので、傘は折り畳んで手に持ったままロープ柵や木柵を頼って体を引き上げながら黙々と登る。気がつくと傘の柄がなくなっていた。ねじが緩んで本体から抜けてしまったようだ。後から登ってくる仲間に「落ちていたら拾ってきてえー」と叫ぶ。

お寺から35分で尾根の鞍部に9:50着、仲間の到着を待つ。叫び声を聞く前に落ちている傘の柄を見つけたので「手すりの柵の上に乗せてきた」とのことだった。平日でこんな天気では登山者もいないだろう。鞍部の大きな木の根元にザックはデポして山頂を往復することに衆議一決。

尾根道を登ったり下ったり、去年の夏の大屯山(テドンサン)にもあった吊り橋と同様の雲の吊り橋が現れる。この雲の吊り橋は2008年に完成、長さ90m、高さ70m、幅1.2m、韓国で最も長く最も高いところに架けられているとのことだ。この辺りは紅葉が始まっていて橋の先には岩峰も見える。渡っ



文人峰山頂

た先は岩道ではなく整備された階段で12の峰の1つの文人峰に10:45登頂。

戻る途中、にぎやかな声が聞こえてくる。吊り橋を渡る若い登山者グループの声だった。鞍部に戻ると尾根続きの鉄階段を下りてくる登山者に会う。これも若者で韓国の登山者は若者が圧倒的に多い。再び荷物を背負ってお寺まで33分かかり、登りも下りもほぼ同タイムだ。下りついた境内は女性参拝者で溢れていた。売店で清凉山の地図が印刷されたバンドナ(3,000ウォン)を記念に買う。

雨模様なのでお寺からの下りは一番近い車道をとったら、これがまた急坂続き、滑りそうで怖かった。それでも25分で奉化行きのバス停に13:05着、バスが出るまで1時間以上ある。おなかも空いているので、飲食店のある下のバス停まで15分歩き、ネギとイカのチヂミ=パジョ(一皿10,000ウォン)を食べる。温かくておいしかった。食後、初物の柿もサービスされた。

14:30発の奉化行きのバス(@1,200ウォン)に乗り込むと先客の若い男性がアツという表情をうかべる。お寺への下山途中で行き違った人だ。車内で韓国語の分かるSさん、Tさんとの会話がはずんでいた。約40分後、奉化バスターミナルに着くと「鉄道で三陟(サンチョク)に帰る、日本語を勉強している」という彼が太白市行きのバス時刻や運賃(@11,500ウォン)を調べて教えてくれる。案内してくれたバスに乗っていると、彼が乗ってくるではないか! 鉄道は時刻が合わないのでバスで行くとのことだった。

バスは最初、奉化行きのバスが通った道に戻って、鉄道線路を渡ったり線路沿いに走ったり、件の青年は「お母さんに会うと連絡したら迎えに来たのでここで下りる。最後までお手伝いできなくてすみません」との日本語のメモ(スマホの自動翻訳)を残して途中のバス停で降りていった。そのうち山間部のカーブ続きの峠道を越えたバスは1時間40分走っ

て太白に17:30着。

バスターミナルの並び先に、鉄道の太白駅があり観光案内所に行って今夜の宿を探してもらう。民宿は太白山の下にはいっぱいあるが、駅近くにはないとのことだ。この時刻からまたバスに乗って民宿へ行くのはもうイヤ。バスターミナル裏のドンアモーター(1室80,000ウォン@16,000ウォン)に泊まる。バスターミナルで太白山行きの始発時刻を調べ、明日の仁川空港行き的高速バス切符(@39,900ウォン)を購入して宿に入る。

モーターは昨夜のより広く、バスタブもあって設備も上々。荷物を置いて夕食に外出、宿の前の食堂でチゲ鍋(@7,000ウォン)を食べる。メニューは文字表記で絵はない。具は不明なので、無難な豆腐鍋を頼んだ。Tさんだけ天山鍋に挑戦するといろいろな野菜が入った鍋だった。次回、チゲを注文する機会があったらわたしも天山鍋にしよう。

明日の山用にリンゴを買う(3個で5,000ウォン)品質も価格も安東産が優れていた。天気予報を見るつもののTVから御嶽山の火山噴火ニュースが流れてきてびっくりだ。予報は朝から雨、明日の太白山は諦めて石炭博物館見学に切り替えることになった。太白市は日本統治時代から石炭の産地で炭鉱の町として栄えたとか。

◆9月30日(火)

予報通りの雨模様だ。寒さ対策もあって雨具に身を固めて出発。太白山行き市内バス(@1,100ウォン)は運賃先払いだった。細長い太白市街を走って川を渡ると郊外に出た。民宿村を過ぎると堂谷(タンゴル)バス停8:35着(市内渋滞ありで所要25分)

駐車場脇から太白山方向への車道を歩き出すと建物があり入場料@2,000ウォンを支払う。温度表示は11℃、雨具の上下着用でちょうど良い。小雨の登山口広場には全く人影がなかった。右手へ上って石炭博物館を見学する。S姉がいうには「1995年に沢登りの帰途、寄った時には貧相な博物館だったのに、地下1Fから地上3Fの立派な大きな博物館に変わってびっくりだ」

1階の鉱物展示はハングルの鉱物名は意味不明、さっぱりわからなくても巨大な宝石原石には目を奪われた。当時の石炭採掘方法の展示をみて3階から

エレベーターに乗ると大音響とともに地下1階の体験坑道に下りつき、そこを通りぬけると出口となる。

小雨の登山口広場に戻るとナップザック姿の一群が広場奥の建物に向かっている。行ってみれば売店でビニール雨合羽を買っていたのだ。10時半のこれから太白山に登るのだ。若いから貧弱な装備でも耐えられる? 私たちは、ちょっと心配になったが、バス停に戻り10:40発太白市バスに乗車、先払い運賃で行きと同じ@1,100ウォンを用意していたが、運転手は@1,300ウォンというのだ。言い争うこともできずに支払うしかなかった。

バスターミナル11:00着、チヂミを求めて街中を歩く。絵を見て何とか探し当て、ネギ・キノコ・アサリ・イカ入りのあつあつのパジョ(2枚で14,000ウォン)を食べる。宿に預けたザックを回収して13:00発仁川空港行き高速バスの人となる。

どこをどう走っているか分からないが「堤川バスターミナル」の先で巨大なサツマイモ像を、次に巨大な「モモ」像を車窓から見る。その辺りが一大産地なのだろう。高速道路並の一般道を離れ15:27、甘谷ICから高速道路に入り、金浦空港に立ち寄り17:35、仁川空港に到着した。ホテルの無料送迎車を頼みスカイホテル18:05着。

昨年のサムゲタン(@12,000ウォン)の専門店に行く。会計係から@33,800ウォン返金がありスーパーでお土産にトウモロコシ(オクスス)茶と黒米を買った。

◆10月1日(水)

7:50発で仁川空港に送ってもらう。8:00には空港着、搭乗手続き後の手荷物検査は長蛇の列!アジア大会のせいなのか? こんな混雑は初めてだ。出国審査が終わったのは搭乗時刻の5分前、格安航空便のゲートは端っこで遙かに遠い。早足で搭乗口に行けばなんと1番乗り、みんな遅れていたのだ。後から後から乗客が乗り込み、飛行機は満席となって10:45離陸、機内販売のカップラーメン@5,000ウォンが食料を買い込めなかった乗客によく売っていた。成田には13:00着。

登れた山は一つだけだったが、おいしいものを食べられて満足! 格安の山旅を楽しめS姉には感謝、感謝である。来年は太白山に再挑戦したいものだ。(終り)

フィリピン滞在記 ⑤ ---日本への一時帰国とその後のフィリピンでの活動

為我井輝忠

3月で日本語クラスは一段落したので、日本に一時帰国した。私が San Fernando (サン・フェルナンド) で教えているところは TESDA (Technical Education & Science Development Authority) という教育機関で、フィリピン全土に6～7か所ほどある高等科学技術学院のひとつである。

一時帰国したのは、3月23日から4月6日までの2週間である。真夏のフィリピン(この時期4月、5月は夏の季節で、学校はすべて休みである)から春先のまだ寒さが残る日本への帰国は、羽田空港に着いた途端風邪を引きそうなほどの寒さで、大いに戸惑いを感じた。

2週間と言ってもあっという間であった。今回の帰国は2つの目的があった。ひとつは、3月29日(日)『はだしのゲン』出版記念会に出席することであった。スリランカの仏教僧で千葉県香取市にある蘭華寺の住職であるダランガレー・ソーマシリ師が数年前から取り組んでいた中沢啓治原作『はだしのゲン』を日本語からスリランカのシンハラ語に翻訳された。その出版を祝う会が蘭華寺で行われた。

もう一つは、まちだ・さがみユネスコ協会の被爆ア

オギリ2世の植樹式が町田市にある勝楽寺で3月30日(月)に行われ、関係者としてその式典に出席した。

被爆アオギリというのは、昭和20年(1945年)8月6日アメリカ軍の原子爆弾投下によって被爆した広島で、わずかに残った数本の青桐の木で、その後息を吹き返し元気になり、その2世が日本各地に移植されている。今回、広島市長にお願いして頂いた一本の苗木を町田の地に植樹することが出来た。

この両者とも前から出席を要請されていたので、早めに航空券を購入しておき、無事に出席することが出来た。その他にも「わんりい」の会の皆さんとお会いしたり、和歌山と大阪に行き、スリランカ人留学生と会う等多忙を極めた。

私のフィリピンへ戻るに際して家内を伴って行った。家内にとってはフィリピン訪問は2回目になるが、前回はマニラとその周辺だけだったので旅行というほどのことではない。今回はマニラに3泊、ビガンに2泊、その他はサン・フェルナンドに滞在し、一緒に2週間を過ごした。

サン・フェルナンドにいる間にダグーパンというところに行く機会もあった。ここで「日本文化フェス

た」を開催し、折り紙や日本文化を紹介する機会があった。ここで「日本文化フェス

た」を開催し、折り紙や日本文化を紹介する機会があった。ここで「日本文化フェス



『はだしのゲン』出版記念会で挨拶をしているソーマシリ師



「まちだ・ユネスコ協会」での被爆アオギリ2世植樹式



ダグーパンでの日本文化紹介で折り紙を教える筆者



フィリピン人の名前をひらがな、カタカナ、漢字で紹介している為我井夫人。

ティバル」が開催されるためにその手伝いに2人で参加した。これは地元にある事務所のあるNISVA(技能ボランティア海外派遣協会)がバングース・フェスティバルの一環として協力開催したもので、日本人の方々が20名近くまたその関係者たちも参加された。浴衣の着付け、

カラオケ大会、折り紙コーナー、生け花コーナー、マッサージ等の分野で日本文化の紹介が行われた。私たちは折り紙コーナーに参加し、地元の多くの方々に紹介することが出来た。どれも地元の人々が熱心に参加され、やりがいがあった。

今回はあまり遠出はしなかった。サン・フェルナンドからバスで3時間ほどのビガンへ出掛けただけであった。ここはスペイン時代の街並みが残る古い街で、歩いているとかつての古い華やかな頃を思わせる建物や雰囲気随所に残されている。街中をカレッサと呼ばれる馬車で見学したが、大いに興味のあるところである。帰路サン・フェナドへ戻る途中に「サンタ・マリア教会」(正式名はヌエストラ・セニョーラ・デ・ラ・アスンシオン教会)に立ち寄った。ここも世



スペイン風の街並みが世界遺産に登録されているビガン(Vigan)の街並み

界遺産に登録されているバロック様式の教会である。

こんなふうにしてあわただしい帰国と家内の来比はかなり忙しい毎日であった。しかし、私にとっては久しぶりの日本での生活に心安らぐことが出来、また家内にとってもフィリピンの素晴らしさを体験できたものと思う。

タランガレー・ソーマシリ師のこと

昨年9月のまだ残暑が厳しい頃、水彩画家の友人の個展で、初めてタランガレー・ソーマシリ師にお会いした。友人は、スリランカで使用されている日本語教科書の挿絵を描いたのが機縁で、ソーマシリ師と既に知り合いだったのだ。

古い民家を改造した風の、やや暗いギャラリーで友人とお茶を飲んでいると、ギャラリーの入り口が開かれガッチリした小麦色の体躯に鮮やかな緋色の袈裟で身を包んだ師が、光を背に“燃え上がる炎の塊”とでもいいたいような、そんな感じで入って来られた。

日本語はよくお出来になられるご様子だったがご自分はあまり話されず、どちらかといえば私達が話すのを温かな心で聞いて下さっているといった安心感があった。帰りは立川から新宿まで帰りを一緒にした。電車の中では私が一方的に話していたような気がするが、とても波長が合っている心地だった。

師が翻訳の、シンハラ語訳「はだしのゲン」(1巻、2巻)出版記念の会を報道した毎日新聞によれば、師は日本とスリランカとを行ったり来たりされながら、日本では香取市の蘭華寺でスリランカ人に布教活動をし、スリランカに帰られては、コロombo郊外の平和寺の住職を務め、26年に亘るスリランカ内戦などによる孤児(8~20歳)35人と暮らしているとのことだ。昨年9月、「戦争は苦しみ、悲しみ、悩みしか残さない。平和の大切さを訴えているこの作品を紹介したい」とシンハラ語での翻訳を思い立ち、午前5時からの寺の仕事に差し障らないよう、起床を更に2時間早めて翻訳に充てたそうので、今年6月には第3巻が出版の予定とある。

(田井記)

前回話したように、私達が日常的に食べ慣れているカレーは、スリランカやインドから直接伝えられたのではなく、先ずはヨーロッパに伝わった後に、ヨーロッパ料理の一つとして日本に伝えられました。ヨーロッパに渡ったカレーは、最初の頃は主にヨーロッパ各国の王室や貴族などの上流階級で、遠い異国の料理として食べられていました。主な調味料であるスパイスが非常に高価であったために、中流階級以下の家庭ではなかなか手が出なかったのです。もしかするとカレーという料理名すらも知られていなかったかもしれません。ヨーロッパに渡ったカレーがどのように変わっていったかを僕なりに推測して読者の皆さんにカレーのルーツを知ってもらう機会になればよいと思います。

当時の上流階級の家々には其々お抱えの料理人がいました。料理人達は初めてカレーなる料理を作ると主人から命ぜられた時には、さぞかし困った事でしょう。ごく一部の料理人は主人に帯同されてスリランカやインドでカレーを食べた事があったでしょうが、大部分の料理人にとっては、カレーとはスパイスを多用した未知の料理です。最初の頃にはレシピも整っていません。主人が現地で食べた経験があれば、どのような味の料理なのか、どのようにして食べるのかを主人に聞くことが出来ますが、ほとんどの主人は食べた経験がなかったはずで、恐らくは上流階級の人々が集まるサロンか何処かでカレーという食べ物がある事を聞いて、気まぐれに料理人に作るように命じたのでしょう。

カレー料理を作ることを命じられた料理人は主人から聞いた話や現地で食べた事のある料理人仲間から集めた様々な情報から調理したのではないのでしょうか。当時も今も、ヨーロッパ料理の命と言えはソースです。未知の料理とはいえ、料理人たちはカレー料理の調理はソースを使う料理を応用したはずで、多分ソースにカレー用のスパイスを加えて食材を煮込んだと思いませんか。更に、シチューを煮込むように赤色や緑色の食材、ジャガイモなどの野菜も加えてより

豪華な料理にした事でしょう。何しろ上流階級ですからね。ところがソースをベースにした料理はフォン(ソースのベースとなる出し汁)作りから始まりますので、玉ねぎなど、野菜の「甘味」が加わり、更にジャガイモ等の野菜を加えると「とろみ」が付くので、スリランカやインドのカレーとはかなり違ってきます。スリランカやインドの様に暑い気候ではないので、辛みによって食欲を増進させる必要もないので、これ位の違いは許容範囲内だったと思われま。

さて、英国ロンドンには18世紀初頭から仕出し屋を営業していたクロス&ブラックウェル(C&B)という会社がありました。上流階級でのパーティー等に食事を提供していたのですが、カレー料理の注文が増えるにつれ、1回ごとに貴重なスパイスを調理するのはロスも出るし、手間もかかるのでもっと安価で手軽にカレー料理を作ろうと研究を重ね、18世紀終盤にはC&B Curry Powder (以下カレー粉)を商品化する事に成功しました。この商品が市場で売られるようになって、ヨーロッパの中流階級以下の家庭にもカレーという料理が広がり、多くのレシピが誕生する事になります。

日本では明治維新によって開国され、文明開化の波に乗ってC&B社のカレー粉とレシピ本が日本に伝わりました。冒頭に書いたように、これらのレシピ本では、他の料理と同様にカレーもヨーロッパ料理の一つとして紹介されましたので、スリランカのサラサラとしたカレーとは全く違った料理がカレーとして日本に定着して行く事になります。

ところでスリランカのカレーは、前回も書いたように、色々な食材と一緒に調理した日本のカレーと違って、単独の食材それぞれを最も生かす何種類かのスパイスを使って調理されます。

日本でも最近は多種多様なスパイスが、わざわざ専門店に行かなくても近所のスーパー等で購入できるようになりましたから、スパイスを選んで自分好みのカレーを作る事が出来るようになりました。これまではカレー粉や固形ルー無しには、家庭ではカレーを作

ることは出来ませんでした。僕も子供のころから母親の作ってくれた、肉や野菜を炒めて水を加え、カレー粉と小麦粉を炒めたルーを入れて作るカレーが大好きでした。僕はいまでも、普段は辛めの固形ルーを使ったカレーを作っています。スリランカのカレーも日本のカレーもそれぞれ美味しいですからね。日本のカレーについてスリランカ人の友人に聞いてみ

ると、自分達のカレーとは全く別の食べ物として食べれば、結構美味しいと言っていました。また、インド人に日本のカレーを食べさせたところ、「美味しいです。これは何という料理ですか」と訊かれたという話をよく耳にします。

取り止めのない話になってしまいました。カレーの話は、きりがないのでもう1回で止める事にします。

瀋陽 ⇄ 町田 ⇄ 雲南へと思いをつなぐ 雲南省少数民族の里子たちの手紙翻訳をして思うこと

崔 貞 (黒田真子)

認定NPO雲南聯誼協会のことを知ったのは‘わんりい’に入会して1カ月経った頃、協会から雲南省魯甸県地震・教育復興支援募金の呼び掛けがあり、‘わんりい’がその呼び掛けに協力することになってからのことです。雲南省について関心が深まり調べるようになりました。

私の出身は中国東北地域の遼寧省瀋陽市で、西南地域の雲南省昆明市までの距離が3400キロもあり、飛行機では6時間くらい掛かります。直通の高速列車はなく、北京、湖南省長沙で乗り換えても、乗車時間だけで16時間を超えます。普通車で行く場合は3日間も掛かります。距離的に離れていることもあって、私の雲南省に関する知識は、少数民族がたくさん住んでいることや米粉料理が有名なこと、藍染が独特で素敵ということ以外はあまり知りませんでした。

しかし、日本での留学・就職・結婚出産等の体験や経験を経、日本での生活が長くなると共に雲南に興味を持っていらっしゃる日本の皆さんが多くいらっしゃることを知りました。そして‘わんりい’に入会后、雲南の子供写真展などを見る機会があり中国に居る時よりも雲南を身近に感じるようになりました。‘わんりい’の活動を通して認定NPO雲南聯誼協会の「25の小さな夢基金」プロジェクト(「昆明女子中学校」(雲南省昆明市)春蕾クラス在籍の少数民族女子生徒への

教育支援)を知り、私自身も高校進学を希望する少数民族子女の教育支援を手伝いたいと考え里親の一人になりました。

さて、教育支援者である里親へは、里子の高校生たちが、日々の学生生活やお正月の様子を綴った手紙が送られて来ます。日本雲南聯誼協会の活動の一環としてこれらの手紙を日本語に翻訳して里親に送るという



日本雲南聯誼協会事務所にて
理事長・初鹿野惠蘭氏(右端)/崔貞さん(左から2人目)

仕事があります。協会の大地震教育復興支援の呼びかけへの協力を機に、‘わんりい’が里子たちの手紙の翻訳で協会に協力することになり、早速、今年3月に「中国語翻訳勉強会」がスタートし、手紙の翻訳作業が始まりました。私もメンバーに加わり何通かの手紙の翻訳をしました。それ

らの手紙を読んでいますと、24年前に私が中国の高校を卒業して日本での留学を始めた当時の自分を思い出しました。

日本に来たばかりの頃は、福岡市にある九州英数学館という予備校で日本語を勉強しながら大学進学の準備をしていました。予備校の理事長が私の保証人になってくださって、週末にご自宅に招待して下さったり、夏休みにホームステイさせて頂いたり、その上、大学入学後も勉学に専念できるように奨学金を頂いたりなど手厚い支援と温かい応援を頂きました。そのお陰で日本での留学生活はとても充実したものになりました。今、女子大学などで中国語教育の仕事に携わって

いる自分があるのも24年前にこのようなご支援があったからだ
と感謝の気持ちを忘れることはありません。

手紙を通して里子たちが親元を離れ、寄宿生活しながら
大学受験の勉強に勤しむ様子がよく分かってきます。春休みに
なると、何時間も掛けて故郷の実家に戻る様子やお正月に家
族そろって一家団欒の様子など目に浮かんできます。里親の
応援が彼女たちにとって大変大きな力になっていることは
間違いありません。青春の真ただ中で勉強に打ち込んで、学
校の友たち同士で切磋琢磨して成長していけることに大変
喜びを感じている様子が読んでみると目に見えるようで、
私も嬉しくなり是非このまま頑張って夢をかなえてもらいた
いと心から願っています。

今の私の夢は里子たちが晴れ着姿で卒業式に出席している
様子を見ることです。手紙の翻訳を通して、瀋陽 ⇄ 町田 ⇄
雲南へと遠く離れている三か所を結ぶ夢に心躍らせていま
す。

◆‘わんりい’活動報告

翻訳勉強会初顔合わせしました

4月29日、休日にも拘らず、翻訳勉強会へ参加の意思表示をしてくださった皆様、14名全員がお集まりくださいました。丁度、この会合の前に、実際の翻訳をお願いしていたので、切実な疑問点・問題点を話し合うことが出来ました。



これからは、翻訳をする時に、困ったことや、分からないことを、メール上で解決できるように、グループ全体での送受信をすることにしました。

中国語ネイティブの方が4名(うち二人は留学生)参加してくださっているので、安心です。お互いの力を補い合って、勉強とボランティアが出来たら素晴らしいと考えています。皆様の応援をお願いします。

(世話人有為楠)

《‘わんりい’掲示板 I》

【‘わんりい’お料理の会の催し】

誰でもできる彩り華やかなキャラクター弁当を作ってみよう！！

叶霖(イエリン)さんと一緒に作る楽しいお弁当

まちだ中央公民館 6F・料理室 2015年5月15日(金) 11:00~14:00

- 参加会費：1,500円(講師謝礼 材料費 弁当箱代)
- 募集人数：15名(最多20名) ● 持ち物：エプロン 筆記用具
- 申込みと問合せ：☎042-734-5100 ‘わんりい’ E-mail : wanli@jcom.home.ne.jp



イメージ

【‘わんりい’ボイス・トレの会の催し】

～あなたに元気を贈りたい～ 歌と語りのライブ「花は咲く」

町田市民フォーラム 3F ホール (東京都町田市原町田4-9-8)

小田急線町田駅から徒歩約8分/JR横浜線 町田駅から徒歩約5分

2015年6月5日(金) 14:00 ~ 15:30 (開場: 13:30)

参加会費: 2000円 (ペア券3000円)

1部 あふれ出る生命力(いのち) Emmeエメの唄

※ボイス・トレ体験コーナーもあります

2部 “生きる力”を呼び起こす 楓民^{ふうみん}& Emmeエメの唄

★楓民:〈語り人〉萩生田千津子/〈唄い人〉Emme/〈奏で人〉松本MOCO

● 予約お申込み: ☎042-735-7187 (鈴木)
E-mail wanli@jcom.home.ne.jp (わんりい)

● チケット直接購入: 久美堂本店 2F(小田急線東口カリヨン広場脇)
☎042-725-1330

● お問合せ: ☎042-734-5100 or wanli@jcom.home.ne.jp



〈唄い人〉Emme



〈語り人〉萩生田千津子



〈奏で人〉松本MOCO

【日中友好会館・文化事業部の催し】

ピリリ!と面白い!

中国漫画展

現代漫画の代表的作品の原画 約60点を展示

入場無料

<http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/6236>

中国の「漫画」は一般的に世相を描く風刺画を指す。社会問題や人々の日常風景を、ピリリ!と辛辣かつユーモアに描いた「漫画」は、漫画専門雑誌、人民日報をはじめとする各地の新聞に掲載され、一般市民に笑いと共感を与え、長年親しまれてきました。「うまい!」と思わず膝を打ちたくなる機知に富んだ作品から中国の「今」が見える

- 会 場：日中友好会館美術館（東京都文京区後楽1-5-3）
- 会 期：2015年5月28日（木）～6月28日（日） 休館、毎週月曜日
- 開館時間：10：00～17：00（初日は15：00開館）
- 主 催：（公財）日中友好会館他



「位置が間違っている」曲士龍 2014年

【日中友好会館美術館での関連イベント】

- ◆ オープニングセレモニー：5月28日（木）15:00～ 参加無料、申込不要
- ◆ 中国漫画家による作画実演：5月28日（木）15:40頃～ 無料、申込不要
- ◆ ミュージアムミニコンサート：6月5日（金）15:00～（約30分）
中国民族楽器 古琴の演奏会 参加無料、申込不要
※座席40席（先着順） ※立ち見の可能性あり
- ◆ 絵手紙体験講座：6月9日（火）14:00～16:00
指導：日本絵手紙協会認定講師 植木啓子氏 定員15名
参加費：200円（道具貸出・材料費込） ※要事前申込み



「競争」林忠業 2008年

【日中友好会館大ホールでの関連イベント】

- ◆ 記念講演会 / 茶話会「漫画から読む中国現代ニュース」
講師：NHK解説委員 加藤 青延 氏（講演90分、茶話会60分） 定員50名
日時：6月16日（火）14:00～16:30/500円（資料、茶話代込） ※要事前申し込み
※6/9絵手紙体験講座、6/16記念講演会は、電話・FAX・e-mailのいずれかにて氏名・住所・電話番号を添えて日中友好会館事業部へ申込み（定員に達し次第受付終了）
☎03-3815-5085 FAX03-3811-5263 e-mail:bunka@jcfc.or.jp

町田中央図書館絵本原画展

‘わりい’会員の佐藤紀子（張怡申）さんの絵本の原画が展示されます。是非、お立ち寄りを。

▲ 町田中央図書館 エスカレーター脇展示コーナー

▲ 2015年6月9日（火）～6月21日（日）

中央図書館の開館時間中は鑑賞できます。



- ◆ 火・水・金
10:00～20:00
- ◆ 木・土・日・祝
10:00～17:00
- 月曜と6月11日（木）は休館です。

第10回「弦之縁」

姜小青フレンドリーコンサート

<http://jiang-xiaoqing.xii.jp/schedule/>

伝統楽器と近代的な電子楽器からなる、伝統曲、オリジナル曲、そしてポップスなど

姜小青 (古箏)

ルイルイ ハルディ パンダナ (エレクトーン)

友情出演：費堅蓉 (三弦、琵琶 ほか)

● 2015年6月17日（水）19:00開演（開場：18:30）

● めぐるパーシモンホール
小ホール（東京都目黒区八雲1-1-1）

● 参加費：4,000円 / 全席自由

● 問合せ & 申込：

☎080-1304-7347（村山）

E-mail：xianzhiyuan_hz@ybb.ne.jp



主催：姜小青フレンドリーコンサート実行委員会

【予告】町田国際交流センター・協力部会の催し

6月25日（木）14：30～16：00

於：町田市民フォーラム・視聴覚室（参加無料）

映像とお話し「雲南省、貴州省など西南中国の少数民族たちは、何故、かくも精緻な素晴らしき衣装を纏うのか」

【2015年5月定例会と6月号のおたより発送準備】

両方とも、三輪センター・第3会議室です。

◆ 5月定例会：5月12日（火）13：30～

◆ 6月号おたより発送準備：5月31日（日）10：30～

※おたより発送準備の日はお弁当を持参ください。

◆わんりいの催し **中国語で読む・漢詩の会**

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

2015年5月17日(日)/6月7日(日)
まちだ中央公民館、第3・第4 学習室

- ▲時間：10:00～11:30
 - ▲講師：植田渥雄先生
 (現桜美林大学孔子学院講師)
 - ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
 - ▲定員：20名(原則として)
- *録音機をお持ちの方はご持参下さい。



◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)
 E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

◆わんりいの催し **ボイストレーニングをして日本の歌を美しく歌おう!**

あなたも私も笑顔が美しくなる!身体力を抜いて、気持よく発声しよう!!

- ▲5月の講座：5月26日(火)、まちだ中央公民館・視聴覚室
- ▲6月の講座：6月23日(火)、町田市民フォーラム・視聴覚室
- ▲時間 10:00～11:30

★動きやすい服装でご参加ください

- ▲5月の練習歌「心の瞳」「花は咲く」
- ▲講師：Emmè(歌手)
- ▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)
- ▲定員：15名(原則として)



◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)
 E-mail:wanni@jcom.home.ne.jp(わんりい)

初心者のための水墨画教室〈鶴川水墨画教室〉体験のお誘い

生徒のレベルと個性に応じた適切な指導を体験してみませんか。気楽にご参加ください。



- 講師：満柏(◎日中水墨協会会長)
- 場所：鶴川市民センター(駐車場有)
 〒195-0062 東京都町田市大蔵町1981-4
- 曜日・時間：毎月第2、第4(月)
 14:00～16:00
- 体験参加費：1000円 見学：無料
- 問合せ：野島 ☎042-735-6135



【アクセス】小田急線鶴川駅0番バス停「野津田車庫」行「下大蔵」下車・徒歩5分、
 又は1番バス停「若葉台駅」行「鶴川市民センター前」下車徒歩1分 駐車場有

墨と色の饗宴—中国実力派画家五人展

満柏さんとイェリンさんの作品も展示されます

<http://www.japan-events.net/events/262182>

- 5月6日(水)～5月11日(月)
- 品川区民ギャラリー
 (☎:03-3774-5151 イトーヨーカドー大井町店8階)
 JR京浜東北線・東急大井町線・りんかい線 大井町駅徒歩2分
- 10:00～18:00(初日:13:00～
 最終日、17:00まで)

- ◆主催：日中水墨協会
- ◆後援：中国大使館文化部、爽健堂画廊、
 東京中国画院



'わんりい' 203号の主な目次

北京雑感(94) 北京のリス	2
論語断片⑥ 暴虎馮河	3
媛媛讲故事(73)「和氏璧」VII	4
諺・慣用句(39)「人口に膾炙する」	7
中国・城市めぐり(41) 上海と普陀山②	8
詩人尹世霖の童詩の世界⑫	11
鄧さんの観光ガイド「太原の歴史」	12
中国の笑い話22(365夜笑話より)	13
「文明の衝突」について思う	14
初秋の韓国低山歩き②	16
フィリピン滞日記⑥日本への一時帰国とその後の活動	18
タランガレー・ソーマシリ師のこと	19
(87)スリランカ・カレーよもやま話④	20
雲南省少数民族の里子たちの手紙翻訳をして思う	21
'わんりい' 掲示板	22～24